

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	布 柴 靖 枝
論文題目	クライアントの歴史性と物語生成に関する心理臨床研究 －多世代的視点からみた症状の意味と家族神話－		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、我々が生きる営みの中で自己を形成しており、たとえそれが自らに苦しみをもたらす心の症状であっても、生きていく上での適応の一形態であることに注目する。医療人類学者の Kleinman ,A.(1988/1996) は、「病い (illness)」は、「多義的 (polysemic)」で、「多声的 (multi-vocal)」であると述べ、病いの体験や出来事は、「つねに複数の意味を表したり、あるいは隠蔽している」とし、科学的治療の対象とされてきた疾患 (disease) に個々の体験としての多義性を見出してきた。これらの病いや症状の体験は、ある程度の年齢まで達すると、アイデンティティに取り込まれ、クライアントの生きる物語の一部と化していく。従ってクライアントにとっての症状の意味を理解せずして、それらをただ単に取り除こうとする試みは、クライアントの一部を排除し、否定する行為にもなりかねない。このように症状の否定的側面のみを捉えるのではなく、その病いや症状がクライアントの歴史性において、何を引き受け、どのような意味をもたらしているのかを理解することは重要である。論文では、多世代にわたり家族の中で紡がれてきた物語、なかでもクライアントが「今、こうしてある」わけを知ることを可能にし、自らの「はじまり」を知り、語られざる物語としての症状を全人的に理解することを可能にする中核的な物語を家族神話と呼び、その中に、クライアントが抱える症状に実存的意味を見いだすことが出来るとする。まず本研究の中心概念となる歴史性と家族神話について、先行研究をもとに次のように定義づける。歴史性は、歴史 (history) の語源になったラテン語の「ヒストリア (historia)」として、「史実 (現実の出来事)」、「歴史」という意味のみならず、生成と変化をし続ける「物語性」、「神話性」、出来事と出来事をつなぎ、世界との関わりを意味する「世界観」をも内包する概念として広義に用いている。家族神話は、家族的無意識を引き受け、多世代にわたり意識的、無意識的に世代間伝達されてきた家族の物語であり、個人の行動や価値観、感情を規制し、独自の世界観を形成している家族の営みの中で生成された物語として捉え、論を展開する。</p> <p>本論文は、以上の観点に基づき、クライアントの症状を病理的なものとしてのみ捉えるのではなく、クライアントの歴史性の中からその意味を理解することの重要性について、複数の事例をもとに多角的な観点から論じたものである。</p> <p>第1章では、「クライアントの歴史性と家族神話」に関する先行研究を外観しながら、本研究の目的と意義を明らかにしている。特に世代間伝達について精神分析的立</p>			

(続紙 2)

場と家族療法的立場、症状の意味を実存的に理解していくことを可能にする物語、神話論についての先行研究を中心として、先述の歴史性と家族神話の定義づけがなされた。

第 2 章では、全体の理論展開の導入として強迫神経症の事例との心理療法の経過を検討する。症状を訴える個人だけでなく、家族全体をクライアントとして見立てて関わる視点から、家族と関わることの意味と重要性について論じている。続く第 3 章では、米国において著者が実践した事例をもとにしながら、家族神話を紐解く技法の一つであるジェノグラムについて、その適応のタイミング、適用方法、ジェノグラムを見る観点について検討が進められる。特に背景となる文化的な様相をも考察に組み込み、本論の視点をさらに拡大させて論じている。第 4 章では、クライアントに対する危機介入を通して、語られざる物語がいかに関わり始めるか、また行動化の機序や意味を考察しながら、その回復過程について論じられている。

さらに第 5 章では、家族合同面接において合同ジェノグラムを作成する作業をふまえて、その後の個人面接で夢日記を通して関わった事例をもとに検討が進められる。夢に現れた家族神話を分析し、いかに個の物語や家族神話に変容していくのかについて考察された。そして、心理臨床において避けて通ることができない罪悪感について、第 6 章では取り上げられている。特に家族の営みの中で、家族神話に取り込まれやすいテーマとして、①情緒的遮断と融合の狭間で起こる罪悪感、②分断した忠誠心、見えない忠誠心と罪悪感、③曖昧な喪失と罪悪感、④家族の秘密と罪悪感、⑤未完の悲嘆と生存者罪悪感に焦点を当てて論述された。また物語の変容を妨げる罪悪感や、新しい物語が生まれてくる際に生じる罪悪感についての検討が重ねられている。

最後の第 7 章では、心理臨床家における臨床的想像力と、クライアントが語る物語を一つのピクチャレスクの作業として相互の関係を考察しながら、心理臨床場面で物語が語られることの意味を見直す。そして神話や物語の変容仮説を提示し、家族神話から個の神話を紡いでいくことについて論じている。また本論文の総括として、家族神話の心理臨床的意義と今後の課題についてふれ、物語・神話を生きることの意味についての総括を行い、締め括られている。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は 1 頁を 38 字×36 行で作成し、合わせて、3,000 字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 words で作成し審査結果の要旨は日本語 500～2,000 字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、医療の現場において、また心理臨床の実践においてさえも、ともすると「症状の除去」を第一義的な目的としてかかわり、その奥にある人間性、ひいてはそのクライアントの人生や生き方について見失いがちであることに警鐘を鳴らし、たとえそれが自らに苦しみをもたらす心の症状であっても、生きていく上での適応の一形態であることに注目する。そして症状の意味を、クライアントの歴史性の中で育まれた家族神話を通して実存的に理解し、個人のみならず家族全体を見立てることにより、支援を行っていくという心理臨床的意義と新たな可能性を主張したものである。

心理臨床の実践において、見立ては最も重要な作業であり、本論文は、その見立ての在り方を再検討し、クライアントの症状とは何かという根源的な問いに正面から取り組む、大きな挑戦を行ったものといえる。

本論を進めるに先立ち著者は、中心概念となる歴史性と家族神話について、先行研究をもとに慎重に定義づける。歴史性は、歴史の語源になったラテン語の「ヒストリア (historia)」として、生成と変化をし続ける「物語性」、「神話性」、出来事と出来事をつなぎ、世界との関わりを意味する「世界観」をも内包する広義の概念とする。家族神話は、家族的無意識を引き受け、多世代にわたり意識的、無意識的に世代間伝達されてきた家族の物語であり、個人の行動や価値観、感情を規制し、独自の世界観を形成している家族の営みの中で生成された物語として捉える。

第2章では、著者が上記の視点を抱くきっかけとなる、重篤な強迫症状を抱える事例との取り組みを記述し、家族の歴史性と共に個人を見立てる作業の重要性と導入の意義を主張する。この手法から多角的視点をもった家族合同面接が行われ、症状の一過的な軽快による問題の転換ではなく、家族全体に大きな変革をもたらす。この一連のプロセスの丁寧な記述は、その後の著者の理論展開へ重要な一石を投じていると評価できる。続く第3章において、著者が留学中に関わった米国での事例を取り上げ、多世代に渡るジェノグラムから事例の歴史性と家族神話を理解するプロセスを詳述し、日本人留学生の事例も含め、著者独自の視点による見立てを踏まえて展開された心理療法から、社会・文化的歴史性への考察がすすめられている。ここでは米国の事例ならではの文化的背景に言及し、さらにそこから日本人の歴史性に回帰させる。ここでの展開は、本論が日本独自の文化を背景とした家族のみに焦点を当てた見解にとどまらない、幅広い視野を示す証左となる。

転じて第4章では、行動化を伴った女子青年との個人心理療法をもとに、危機介入を通して「語られなかった物語が語られはじめる」時を視点にその症状の意味を考察する。「危機的な状況は物語再編のチャンスでもある」と理解してかかわる心理療法

(続紙 4)

のプロセスは、著者の理論による見立ての有効性を示す結果をもたらす。さらに第5章では、家族合同面接と個人面接の統合によって、複雑に絡み合った問題と取り組む心理療法のプロセスが記述される。心理療法で直接関わる対象が、家族全体であれ、個人であれ、本論の視点は共通にその家族神話を読み解く実践力を持つことを事例によって示す展開となり、その応用性についても評価できる。加えて個人心理療法で取り上げられた夢日記を通して、深い無意識にある家族神話の変容プロセスが記述され、本論の深さにつなげている。こうして、広さと深さをも包含した形で、家族神話を読み解き、それによって症状を理解する中で、罪悪感という一つのテーマが浮上する。これを第6章で取り上げることにより、多角的に理論を発展させていく。ここでも著者は、罪悪感が、それまで育まれてきた物語が変容を来たすときに立ち現れるものとして捉え直す。そしてそれは、心理療法のプロセスに現れる重要なターニングポイントとして理解する。本論文の前半で取り上げられた事例が別の角度で考察され、新たな家族神話の理解が生まれる。このように本論文全体が、新たな生成と過去への言及を繰り返しながら前進していく、歴史性をもって展開していることをあらためて理解することができ、論文の構成も含めて高く評価することができる。総括となる第7章では、物語が語られることの意味や、家族神話から個の神話を紡いでいくことの意義について論じ、全体を総括している。

口頭試問では、物語と神話の概念整理について、歴史性の定義をめぐる検討や事例に現れる夢の解釈について、議論が展開された。さらには、家族の歴史、神話を読み解いていく手法は、過去にさかのぼって因果関係を検討していくことになってしまっていないかといった点についても議論がなされた。そこでは著者の長年の臨床経験に基づく揺らがない姿勢と共に、柔軟な思考性が発揮され、議論そのものが深い心理臨床の世界を彷彿とさせるものとなった。それ故それらについて、本文中に加筆していくことがさらに本論文を高めるであろうことが指摘された。けれどもそのことは、著者の今後の課題を明確にするものであって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成 25年 2月 6日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降